

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792579

研究課題名(和文) 乳がんの女性の不確かさに対するオンコロジーナースの看護実践

研究課題名(英文) Advanced Nursing Care for Women Living with the Uncertainty of Breast Cancer

研究代表者

長坂 育代 (Nagasaka, Ikuyo)

千葉大学・看護学研究科・特任准教授

研究者番号：50346160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は不確かさを抱える乳がんの女性への高度な看護実践を記述することである。乳がん看護の知識や経験が豊富な看護師13名(がん看護専門看護師・乳がん看護認定看護師等)に面接を行い、逐語録を質的に分析した。対象者は、女性が不確かさのなかで今何をすべきか分かる、これならやっていけると思える、私はこれでいいと思えることを看護目標としていた。そのための実践として【表情や言動から垣間見えるものに違和感を感じ取る】【思いの背景にあるものを探り問題の核心を捉える】【混沌とした思考を整理し解きほぐす】【個々の特性や状況に応じて提供する情報を調整する】【自ら立つための確かな足場をつくる】の5要素を抽出した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to describe advanced nursing care for women living with the uncertainty that comes from being diagnosed with breast cancer. The interview data was collected by 13 breast cancer expert nurses such as Certified Nurse Specialists in Cancer Nursing and Certified Nurses in Breast Cancer Nursing. The collected data was qualitatively analyzed. The result is showed that the aim of nursing care for the expert nurses was to assist the women understand what they needed to do, have confidence that they can manage the situation or come to terms with their condition. The nurses used 5 core nursing care elements to achieve these: <To notice any subtle signs of hidden emotion and problems through the women's facial expressions and actions>, <To get to the core issues the women are facing>, <To assist the women in organizing their thoughts and calming their nerves>, <To provide information corresponding to individual needs>, <To make a place of comfort and security>.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：乳がん 不確かさ 看護実践 専門看護師 認定看護師

1. 研究開始当初の背景

わが国の乳がんの罹患者数は年々増加の一途をたどり、検診による乳がんの早期発見や治療技術の進歩に伴って、乳がんとともに生きる女性は今後急速に増加していくことが予想されている。乳がんの特徴には、40～50歳代の女性の罹患者が多いことや、腫瘍摘出後も10年という長期に渡って再発する可能性があり一度再発すると完全な治癒は困難なことなどが挙げられる。

乳がんとともに生きることは不確かさを伴うプロセスであり、不確かさは不安や抑うつなどの心理的苦痛を引き起こす要因となる(Lazarus, 1984)と言われている。病における不確かさには、病気の状態に対する曖昧さ、治療やケアシステムの複雑さ、病気の診断や重症度に関する情報の欠如、病気の経過や予後の予測不可能性などがあり、病状が不安定で再燃するがんのような慢性疾患では不確かさの認知の程度が高い(Mishel, 1981, 1999)とされている。すなわち、乳がんの女性が抱える悩みや心の問題の本質には、乳がんという疾患や治療の不確かさがあると言える。

近年、がん患者への心理的ケアの重要性が改めて強調されている。しかしながら、乳がんの女性の心理的適応に向けた看護支援の方法は確立されているとは言えず、看護師個々の意識や実践能力に委ねられているのが現状である。また、わが国において、不確かさの観点から乳がんの女性への有用な看護実践を明らかにしたものは見られない。

乳がん看護において高い実践能力をもつオンコロジーナースの不確かさに対する看護実践の内容を可視化することは、乳がんの女性の心理的適応に向けた看護支援の方法を確立する上でのエビデンスとなると考える。

2. 研究の目的

不確かさを抱える乳がんの女性に対するオンコロジーナースの看護実践の内容を明らかにすること

3. 研究の方法

(1) 用語の操作的定義

不確かさ：乳がんやその治療に関連した事柄に関してコントロール感がない、安全感がない、確信が持てない等と捉える主観的認識

オンコロジーナース：がん患者や家族に対する看護実践の経験が豊富で、がん看護の領域において高い実践能力があると認められた者

(2) 研究デザイン

質的記述的研究

(3) 研究対象者

以下の条件を満たし、かつ研究の趣旨を理解し研究参加に同意が得られた者

臨床経験が5年以上で、乳がん患者や家族への看護実践の経験がある

がん看護領域の専門資格(認定看護師・専門看護師)を有する

(4) 調査内容

属性(所属、臨床経験年数、乳がん看護実践経験年数、専門資格)

乳がんの女性が抱える不確かさに対する認知、および不確かさを抱える乳がんの女性への看護実践の目標と内容

(5) 調査方法

調査内容に関しては、個々の対象者にインタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。

《インタビューガイド》

・あなたは乳がんの女性が不確かさを抱えている状況と聞いて、どのような状況をイメージしますか？(乳がんの女性の不確かさに対する認知)

・そのような状況にある女性に看護を行う際、あなたはその女性にどのようなようになって欲しいと思って関わっていますか？(不確かさを抱える乳がんの女性への看護実践の目標)

・あなたがイメージする不確かさを抱える乳がんの女性への看護実践で印象的な、あるいはうまく関わることができた実践事例について教えてください(不確かさを抱える乳がんの女性への看護実践の内容)

(6) データ分析方法

分析は以下の手順で行った。

逐語録を精読し、対象者の不確かさの認知や看護実践に関する記述を抜き出した。

抜き出した記述を、できる限り対象者の表現を残して不確かさの認知や看護実践の具体を表す簡潔な文章で表現し“コード”とした。

不確かさの認知や看護実践の意味内容が類似するものを集め、簡潔な一文で表現し[サブカテゴリー]とした。

不確かさの観点から意味が類似するものを集め、簡潔な一文で表現し【カテゴリー】とした。

(7) 倫理的配慮

本調査は、千葉大学大学院看護学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した。また、対象者に対して、研究の趣旨、研究参加は自由意志によるもので参加を拒否・中断しても何ら不利益を被ることはないこと、研究成果の活用と匿名性の厳守等について、文書および口頭で説明し同意を得た。

4. 研究成果

(1) 対象者・調査期間・面接回数

対象者

対象者は計13名(全て女性)。対象者の臨床経験年数は平均16.3年(9年～33年)、乳

がん看護実践年数は平均 10.2 年（4 年～24 年）であった。また、がん看護領域の専門資格は、がん看護専門看護師 4 名、乳がん看護認定看護師 7 名、がん化学療法看護認定看護師 1 名、皮膚・排泄ケア看護認定看護師 1 名であった。

調査期間：平成 25 年 3 月～7 月

面接回数・時間：1 回/人・平均 65.8 分

(2) 乳がんの女性が抱える不確かさに対する認知

対象者は、乳がんの女性の不確かさは、乳がんにおける治療選択の複雑さ、治療による影響の曖昧さ、これまで築いてきた生活や自己像に及ぼす影響等の複数の要因によって引き起こされると捉えていた。

具体的には、“乳がんの治療は、選択肢が多様でどれにも医学的なメリットデメリットがあり確実にこうだとかこうなっていくというものがないこと（対象者 A、F、K）”、“乳がんの治療による妊よう性への影響として、ホルモン療法後にもう 1 回子ども産めるのかどうか、抗がん剤治療をしてどのくらいの割合で月経が戻ってくるか、月経があっても本当に子どもを授かるのかが分からないこと（対象者 A、H）”、“乳がんに罹患することで、自分の生命だけでなく、築き始めたもの、自分の人生や居場所、自分が当たり前だと思って生きている生活自体が変わってしまうこと（対象者 C、D、E、L）”等が挙げられた。

そして、乳がんの女性が不確かさを抱えている状態を、複数の要因によって引き起こされた“強く思っているわけではないが少し気になるという状態がずっと続いて、何かもやもやして決めるに決められない（対象 B）”、“今自分が置かれている状況に対して何となく漠然とした不安や心配がある（対象 G）”、“1 つの出来事が起きたことで次の見通しが立たなくなり、思考が整理できず混乱している（対象 C）”等の心理状態にあることと捉えていた。

(3) 不確かさを抱える乳がんの女性に対する看護実践の目標

不確かさを抱えている女性への看護実践の目標として、対象者は、置かれている状況のなかで、その人自身が、今自分がやるべきことが何かが分かること、これなら自分もやっていると見えること、私はこれでいいと思えることを挙げていた。

具体的には、“再発などの不安に目を向けるのではなく、今の生活でやれることを探して、なるべく罹患前の生活に戻ること（対象 M）”、“日常で通院とか薬を飲むとか副作用とかやっかいなことがあっても、このくらいなら続けてみようとかやっていってもいいかなと思えること（対象 B）”、“治療を受けながらも何とか今の生活に慣れていくとか、完全ではなくてもこの辺でいいかなって思

うようにするとか、以前と同じにならないけれども仕方がないかって納得して自分の中である程度落ち着くこと（対象 H）”等が挙げられた。

(4) 不確かさを抱える乳がんの女性に対する看護実践

不確かさを抱える乳がんの女性に対する看護実践の内容として、136 のコード、40 のサブカテゴリーが抽出され、最終的にスライドに示す 5 つのカテゴリーに集約された。以下にカテゴリーの概要を示す。

【表情や言動から垣間見えるものに違和感を感じ取る】

このカテゴリーは、[その人の表情や言動としての意外性を感じる]、[表情や言動から何か普通ではないと感じる]の 2 つのサブカテゴリーで構成された。これは、患者との何気ないやりとりのなかで、一瞬見せた表情の険しさや、反応の乏しさ、ふともらした一言などから、何かを抱えているのではないかということを探る実践を表す。

これには、“これまで淡々と取り乱すことなく治療してきた人が、「やっぱりこの薬って継続しないとだめかしら」と言ったことに、どうしてこの人がそんな言葉を発したのだろうと疑問に思い、声をかけたら、初めてその人が妊娠を考えたいと話した（対象者 B）”、“表情が固くこぼっている感じで、聞きたいことがあるのにそれをためらっているような印象があった（対象者 H）”等のコードが含まれた。

【思いの背景にあるものを探り問題の核心を捉える】

このカテゴリーは、[表情や言動の背景にある思いを見極めるために話を聴く]、[思いを引き出すことに焦点を当てた問いかけをおこなう]、[その人にとっての出来事の意味を捉える]、[その人の価値観や生活のなかで何を大事にしているのかを把握する]、[問題に対する認識を共有し、解決のための糸口をともに探る]等の 10 のサブカテゴリーで構成された。これは、話に耳を傾けながら思いを引き出し、思いの背景や問題の本質を正確に見極めようとする実践を表す。

これには、“はじめはもっと具体的な情報が欲しいのかと思っていましたが、話を聴いていくうちに問題はそれよりも手前にあると感じ、今私に何を求めているのかを見極めようと思ってひたすら話を聴くことに専念した（対象者 F）”、“たとえ病気であっても、きちんと子育てして自分の役割を担っていきたいという気持ちがすごくあって、それが自分なりにできていると思えることが、この方にとっての支えになっていたと思った（対象者 D）”等のコードが含まれた。

【混沌とした思考を整理し解きほぐす】

このカテゴリーは、[思いを吐き出せる雰囲気をつくる]、[吐き出された思いをそのまま受け止める]、[取り込んだ情報のなかから、今必要な情報を選び分ける]、[誤解の誘因となった情報を修正する]、[置かれている状況や問題の本質への気づきを促す]等の10のサブカテゴリーで構成された。これは、患者の思いを受け止め、取り込んでいる情報を整理するなかで、患者と問題に対する認識を共有し、向かっていく方向性を見出していく実践を表す。

これには、“ちょっと誤った解釈をしている場合は、それは違いますよと否定的に言うのではなく、まず何でそう思ったかを聞くようにしている(対象者G)”、“情報や置かれている状況を一緒に整理するなかで、漠然として何も見えなかったものが少し見えてくる。何でもやもやしていたのだろうということも整理されていく(対象者C)”等のコードが含まれた。

【個々の状況や特性に応じて提供する情報を調整する】

このカテゴリーは、[状況や反応を見ながらその人に必要な情報は何かを吟味する]、[状況や反応に応じて一度に提供する情報の量を加減する]、[必要な情報をその人が好む情報のタイプに合わせて受け入れやすい形に変える]、[生活スタイルや要望を汲み取り、その人にフィットする情報に絞って提案する]等の9のサブカテゴリーで構成された。これは、病態や今後の見通しも踏まえながら、その人にとって必要な情報を吟味し、情報の量やタイミング、内容を調整して個々の状況やニーズに合致した情報を提供する実践を表す。

これには、“入院中の患者さんに私が今言うべきことと、後で知ってもらったらいいことを使い分ける必要があると思っている(対象者G)”、“治療による実際の生活への影響を患者さん自身がイメージできるようにする。でもイメージだけだと不安が大きくなるから、その対処法まで一緒に具体的に考える(対象者D)”等のコードが含まれた。

【自らの力で立つための確かな足場をつくる】

このカテゴリーは、[異常ではなく当然の反応であることを伝える]、[選択が間違いないことを保障する]、[心が脅かされない環境をつくる]、[できないことではなく今できていることに目を向ける]、[もともと持っている力を信じ尊重する]等の9のサブカテゴリーで構成された。これは、判断が間違いないことを保障したり、心が脅かされない環境をつくるなどによって、自らの力で立ち上がるための足場をつくる実践を表す。

これには、“高い目標をただ見上げるのではなく1歩1歩近づける。良くはなれなくても悪くはなっていないとか、できないことが

あってもこれはできているとか、そういう確実性のあるものを1個でも一緒に見つけていく(対象者E)”、“患者さんは自分で決める力を実は持っている人だと感じた。結論を出すのは患者さん自身だけけれど、結論を出すまで付き合いますよというスタンスで関わった(対象者B)”等のコードが含まれた。

(5) 考察

オンコロジーナースは、乳がんと診断された女性が抱えている不確かさを、乳がんにおける治療選択の複雑さ、治療による影響の曖昧さ、がんに伴って生じるこれまで築いてきた生活や自己イメージの揺らぎ等の要因が複雑に絡み合っていることを捉えていた。

また、不確かさを抱える乳がんの女性への看護実践は、女性自身が、今自分がやるべきことが何が分かる、これなら自分もやっていけると思える、私はこれでいいと思えることを目標としていた。

そして、不確かさを抱える乳がんの女性への看護実践として、【表情や言動から垣間見えるものに違和感を感じ取る】、【思いの背景にあるものを探り問題の核心を捉える】、【混沌とした思考を整理し解きほぐす】、【個々の状況や特性に応じて提供する情報を調整する】、【自らの力で立つための確かな足場をつくる】の5つの要素が抽出された。

オンコロジーナースは、乳がんの女性が情報や支援を必要とするタイミングを的確に捉え、話を聴くなかで表情や言動の裏にある問題の本質を見極めていた。さらに、不確かさを抱える乳がんの女性に対して、混沌とした思考を整理しながら、その女性にとってよりどころとなる確かな足場をつくる実践を行っていた。

これより、不確かさを抱える乳がんの女性に対するオンコロジーナースの看護実践は、女性が不確かさのなかで自分自身と折り合っていくことを支えることであると言える。そして、このような実践は、乳がんと診断された女性に寄り添い、治療や今後の見通しを踏まえた上で女性の心身の状況や変化を捉えることができる看護師だからこそできる支援であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

1)長坂育代、不確かさを抱える乳がんの女性に対するオンコロジーナースの看護実践、第27回日本がん看護学会学術集会、2014年2月8日、新潟県。

6. 研究組織

1)研究代表者

長坂 育代(NAGASAKA IKUYO)

千葉大学・大学院看護学研究科・特任准教授

研究者番号：50346160